

牧師室から (2022.11.6)

午前0時。教会の玄関の外にある椅子に腰かけて、テーブルに肘をついて一人でボーっとしている。11月に入ったが寒くはない。空を見上げると、雲はなく、青黒い天井に星がいくつか輝いていて、また月が淡い色を放っている。「光害」はそれほどでもない。電灯やガス灯がない時代には、夜の景色はまた違って見えていたことであろう。

ドビュッシーのピアノ曲にベルガマスク組曲というのがあるが、その中に「月の光」という有名な小曲が収められている。彼の時代のパリではもう既に街の明かりがあったかもしれない。それでもこの曲を聴くと、月の青白い光が上から漏れてくるような感じがする。彼の曲は概して旋律が明確でなく、口ずさみにくい。これは彼が意図的にしたことでもある。と言うのは、旋律がはっきり出ると、それについてのイメージが頭の中に刻印され概念化されてしまうからである。概念化されると、はっきりはするはがそれによって固定的な感じになり、概念が邪魔をして全体的に夢幻さが失われるのである。

音の繋がりである旋律と言葉とでは少し違うが、私ども人間は、物事やあるいは五感で感じたことを言葉化、概念化すると分かりやすくなるが、それによって削ぎ落とされ、失ったものがあるはずである。人に対しても、「あの人は完璧主義者だ」とか、逆に「ズボラだ」とか評定してしまうと、その人の別の面が見落とされがちである。そのようなことを以前から考えていたので、私は人と出会ったら、その人の性格を言葉化せずに、その人から伝わってくる全体の感触を心に留めておくだけにしている。

月の光も見る時によって伝わってくる感覚が違って来る。東日本大震災の直後に、荒廃した夜景を月の光が静寂にまた明るく映し出していたのを今でも覚えている。

「神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。」(創世記1章16節)

(鈴木淳一牧師)